

隠元禪師の中国での足跡を訪ねて(1)

副幹事長 福田 哲也

原田博二長崎史談会会長の黄檗文化の研究(一隠元禪師の中国での足跡を訪ねて)の旅が昨年に引き続き行われ、会員6名が随行した。

7月13日14時05分(現地時間)、我々が搭乗した中国東方航空機は台風11号の影響でどんより曇った上海浦東航空に着陸。入国手続きを済ませ送迎広場へ出、林翹潮厦門大学哲学系副教授との合流を待つ。やがて息咳切って現れ、「到着機のターミナルを間違えた…」と言いながらも歓迎の弁。そしてそのまま原口幹事の方に歩み寄り、流暢な日本語と満面の笑みを浮かべ、「日本のおかあさん、よくいらっしかったです!」、「あなたも元気にしよったとね…」と、まるで実の親子が久しぶりに逢ったようなはしゃぎぶり。この二人、実は昨年の隠元禪師の中国での足跡を訪ねる旅で逢って以来、すっかり意気投合し、漫才的な会話をやりとりするまでの仲になったと言う。この和やかな光景に接し、緊張感が一気にほぐれる。そしてもう一方、念家聖福清黄檗文化促進会副会長の出迎えもあった。念副会長には、この後、両膝痛でまともに歩けない私を庇って戴き、荷物を運ぶ・肩を貸すなどのご厚情を賜ることになる。

15時10分、同空港からマイクロバスに乗りし今日の目的地舟山市へ向かう。高速自動車道に入った途端、一過性の豪雨に見舞われる。中国は国土が大きいにだけに雨粒も大きいのか?バスの屋根を叩く雨音の大きさに驚く。時速100km前後のスピードで広大な土地を走り続けること約3時間、一つの橋としては中国一の「杭州湾海上大橋」(32,500m 竣工2008年)が目前に迫る。長崎から大村付近に行くまでの距離が橋である。日本で最も長い橋は東京湾に架かるアクアブリッジ(4,424m)だが、この大橋はその約7倍、橋の両壁には5km毎に赤・青・黄などの色分けが施されていた。眼下に東シナ海を見下ろしながら走っても走っても一向に对岸には辿り着く気配はない、大陸のスケールの大きさと国力を改めて感じる。この大橋を渡る前、平湖のパーキング場で、「ショータイム」をとった意味がよく理解できた。こんな長い橋の途中で生理的な現象を惹起すれば、もうお手上げである。

大橋を通過後、慈城のパーキング場で小休止。福建省の地図(10元(約140円)を購入し、上海から舟山市までの道順を林副教授に教わる。車はさらに南下。車中でも林副教授、念副会長の我々への気配りは尽きることはなく、終始、和やかな雰囲気の中に舟山市の対岸、白峰鎮港に到着したのが20時20分(所要時間約5時間)。

聖地普陀山へは定期船で行く。その定期船出港まであと10分、両膝の激痛に耐え必死に歩く。どうにか船上の人となり、やれやれと思う間もなく20分余で普陀山港に着岸。

舟山市は浙江省の東シナ海にある全1391個の島嶼(トウショ=大小の島々)からなる舟山群島に構成される(このうち人が住んでいるのは103島のみ)。普陀山はその一つの島で周囲約15km、ここに中国四大仏教の一つ普陀山がある。隠元禪師はこの普陀山に参拝して出家の念を起こされたという。

隠元禪師が最初に故郷(福建省福州府福清県万安郷靈得里東林村)を離れたのは21歳のとき。幼い頃、旅に出たまま行方不明になった父を探すためであった。このときは浙江省南部豫章から同省北部の寧波、さらの江蘇省の南京まで探索するが目的は果たせず23歳のとき、一旦、故郷東林村に帰る。

母に再び懇願され、東林村を出たのが26歳のとき。参拝者の多い普陀山へ行けば父の情報も得られるとの思いで出立。しかし、途中の福寧州までたどり着いたとき、路銀を盗まれ、やむなく東林村に戻る。29歳のとき黄檗山(生家東林村から数キロ先)で出家。30歳のとき、北京まで行こうとして杭州から紹興までは行くも、結局、北京には行かなかつたもよう…(正確な足取りは不明)。

33歳のとき、密雲禪師に参じ、39歳で密雲禪師に従って黄檗山に

戻るまでは浙江省北部の各寺に居たのち福建省に滞在。この間、黄檗山の住持となる。

53歳のとき、一旦黄檗山の住持を辞して浙江省の金粟山に費隠禪師を訪問。同省の天童山にある密雲禪師の墓を参る。この後、浙江省嘉興府の福嚴寺に住持として入寺。翌年54歳のとき、福建省に帰り、長楽県の龍泉寺の住持となり、承応3年(1654)63歳で日本へ渡来するまで黄檗山万福寺の住持を務めている(禪林寺住職木村玄和尚の手記より)。

さて、普陀山での投宿「普陀山大酒店」に着いたのは21時20分。部屋に荷物を置き、大酒店で遅い夕食を摂る。円卓に精進料理(普茶料理)が次々と出されるが般若湯が一向に出てこない? それもその筈、普陀山全島が聖地ゆえアルコールの摂取は一切できない習わしとのこと。残念だが、酒のない食事もまた修行なり。部屋は豪華なツインルームに一人一室というまるでVIP並みの待遇であった。

7月14日第2日目、早い朝食を済ませ、「普陀山大酒店」を8時過ぎに出る。林副教授の案内で慧濟寺(法の源は浙江普陀山仏陀の山頂の慧が禪の寺を救うことから来るといわれ、仏頂山寺ともいう)や普濟寺(開創は文和2年(1353)と伝えられており、臨済宗建長寺派に属し、大本山巨福山建長興国禪寺の別格地として、多摩一円に末寺十八ヶ寺を有する同派屈指の名刹。普濟寺の名は、中国の佛教四大聖地の一つ普陀山で最大の寺院と同名であり、前寺ともいう)を参拝。普濟寺では、同寺ナンバー2の門齋駐会副会長兼秘書長(写真右)との面談の機会を得た。林副教授(写真左)と大学の同級生であることから面談が実現したもの。日本では東本願寺の大谷大学でも学び、長崎の興福寺の話も出るなど日本に詳しい僧侶であった。



2015/07/14

我々全員に参拝記念として檀の樹で作られた数珠を頂戴する。次に、法雨寺(曹洞宗の寺院で、普濟寺・慧濟寺とともに「普陀三大寺」の一つ。万歴8年(1580)に建立された海潮庵にはじまり、後に海潮寺から鎮海寺と改名、さらに法雨寺と改められた。法雨寺は普陀山のほぼ中央に位置し、普濟寺が前寺と言うのに対し、後寺と称されている)にも足を運ぶ。上記3カ寺のほか、さらに海岸まで下り潮音洞まで行く。急な下り坂道だったので膝痛の私は断念したが、伝承では潮音洞は波の長期的な浸食により奥行約30m、高さ約100mの切り立った崖の処に観音様の姿が現れたと言われている。ここに立つと海潮の音のすごさが実感できると同時に、観音にすがらざるを得ないような気持ちになるという。年間300万人以上の観光客が参拝する普陀山、この日も大変な人出と暑さも加わって少々バテ気味のなか、普陀港から昨夜乗船した船で対岸の白峰鎮港へ向かう。(つづく)